

独立行政法人大学改革支援・学位授与機構評議員会（第 64 回）議事要旨

- 1 日 時 令和 8 年 3 月 24 日（火）10：00～12：00
- 2 場 所 小平本館 7 階 717 会議室（オンライン併用）
- 3 出席者 木部、近藤、芝井、須藤、高橋、谷口、永田、林、ビール、安井の各評議員
（浅井、上原、大野、大鳥、小原、佐々木、田中、曄道、西尾の各評議員は委任状提出）
服部機構長、光石理事、西田理事、八田審議役、戸田山研究開発部長、
吉川研究開発部主幹、東管理部長、成相評価事業部長、市川大学連携・支援部長、
梶原助成事業部長、小嶋調査役

4 評議員会（第 63 回）議事要旨について

令和 8 年 1 月に書面審議とした第 63 回の議事要旨（案）が確認され、確定版として了承された。

5 議 事

《審議事項》

（1）令和 8 事業年度計画（案）について

令和 8 事業年度計画（案）について審議が行われ、原案どおり承認された。
会議後の修正については、会長に確認の上、機構長一任とすることとされた。
主な意見は以下のとおり。

（○：評議員 ●：機構、以下同）

- 「国立大学法人等の施設整備支援（3）国から承継した財産等の処理②旧特定学校財産の管理処分」について、令和 7 年度と令和 8 年度で同じ記載となっている。令和 7 年度は実施しなかったということか。
- 国から承継した旧特定学校財産については、毎年度分割して売却を進めており、令和 8 年度も令和 7 年度に引き続き売却を行う計画としている。

（2）令和 8 年度機構内当初予算について

令和 8 年度機構内当初予算について審議が行われ、原案どおり承認された。
会議後の修正については、会長に確認の上、機構長一任とすることとされた。
主な意見は以下のとおり。

- 施設の修繕や改修が必要となった場合、まずは老朽化の調査をし、改修計画を立てて予算を執行するのが通常の流れだと思われる。留保額を設定する特別な理由はあるのか。
- 小平本館において施設の老朽化が進んでいることから、文部科学省に修繕・改修費用を要求しているが、耐用年数等の関係で予算措置がされていない状況である。そのため、緊急措置として一定額を留保し対応する予定としている。

（3）学位審査手数料の改定について

学位審査手数料の改定について審議が行われ、原案どおり承認された。

《報告事項》

(1) 令和8年度機構事務組織の再編について

令和8年度機構事務組織の再編について説明があった。

(2) 給与規則等の改正について

給与規則等の改正について説明があった。

(3) 独立行政法人大学改革支援・学位授与機構法第十六条の三に規定する助成業務の実施に関する方針の改定について

助成業務の実施に関する方針の改定について説明があった。

(4) 各事業について

令和7年度の学位授与事業、評価事業、質保証連携事業、国立大学法人等の施設整備支援・運営基盤強化促進支援、助成事業の各事業について報告があった。

主な意見は以下のとおり。

○ 大学等の理系転換支援について、大学で理系転換を図ったとしても、その情報が受験生や保護者、高校の進路指導教員に伝わっていないという現状がある。また、多くの高校では1年生や2年生の段階で文理選択をし、履修科目を絞っているという状況にもあることから、結局のところ入学者が集まらなかったり、進学したとしても求められるレベルに達しなかったりするなど、支援を受けた大学において最終的な理系人材育成につながらないリスクがある。場合によっては、高校の理系担当教員の育成から手を入れる必要もあるかもしれない。現実を踏まえた上で、日本の高等教育や人材育成をどうしていくか、文部科学省と議論しながら制度設計をしていただきたい。

● 将来的に人材のミスマッチが起こるというデータをもとに文部科学省が大学等の理系転換を図っていると承知している。現段階では、まず理系人材育成の器を用意することを優先的に取り組んでいると聞いている。機構としてできることについては、文部科学省と話し合いながら事業を推進したい。

○ 制度の全体像が国民全体に伝わっていないことも大きな問題である。国としての対応が必要な問題といえる。

○ 国立大学法人等の施設整備支援について、予算や実績が減少している印象を受けた。大学からの要望が減っているのか。

● 施設費貸付事業については、各大学からの文部科学省への要望に沿って計画が進められていると承知している。施設費交付事業については、現実的な数字で推移しているものと承知している。

6 その他

(1) 今期をもって退任する評議員について、会長より紹介があった。

(2) 機構役員の異動について連絡があった。

(3) 服部機構長から第11期の評議員任期満了に伴い謝辞が述べられた。

以上